

國學院大學學術情報リポジトリ

The Hashimoto collection at Todai-ji Ryuzo-in

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Udo, Chijo, Kamishima, Ryohei, Kobayashi, Hiroataka, Matsuda, Nana, Tomitaya, Momoko, Yamori, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000135

〔資料紹介〕

東大寺龍藏院橋本家文庫について

有働智瑛、上島亮平、小林大峰、
松田采菜、富田谷桃子、矢森一博

緒言

東大寺龍藏院橋本家文庫（以下「橋本家文庫」とする）は、龍藏院橋本家に伝わる古典籍類である。蔵書数二三部・四七六冊が現存する。主に近世以降の古文書や古典籍であり、仏教書が約七割を占め、他に国史・国文・漢籍なども見られる。これらは江戸中期から明治期にわたる僧侶の学問動向がうかが

え、興味深い資料である。

橋本家が東大寺に入山したのは明治中期である。浄土宗西山派の奈良教区長であった橋本辨準師（一八五八―一九二六）が浄土宗西山派から華嚴宗東大寺に転宗し、室僧として僧籍を東大寺に移行した¹⁾。それ以前は京都で居住し、奈良市紀寺町の超願寺に転居したという。後嗣は故橋本聖準師（一九〇二―一九九四）である。聖準師は東大寺第一九四世別当であった筒井寛聖師の徒弟として入門し、明治初年以降より廃院であった東大

寺龍藏院を昭和二八年に復興した。以後、龍藏院住職として在任し、第二百七世華嚴宗管長・東大寺別当を勤め、東大寺二月堂で行われる修二会悔過法要の声明の名手として伝えられた。また、聖準師の後嗣は、現・東大寺長老橋本聖圓師である。

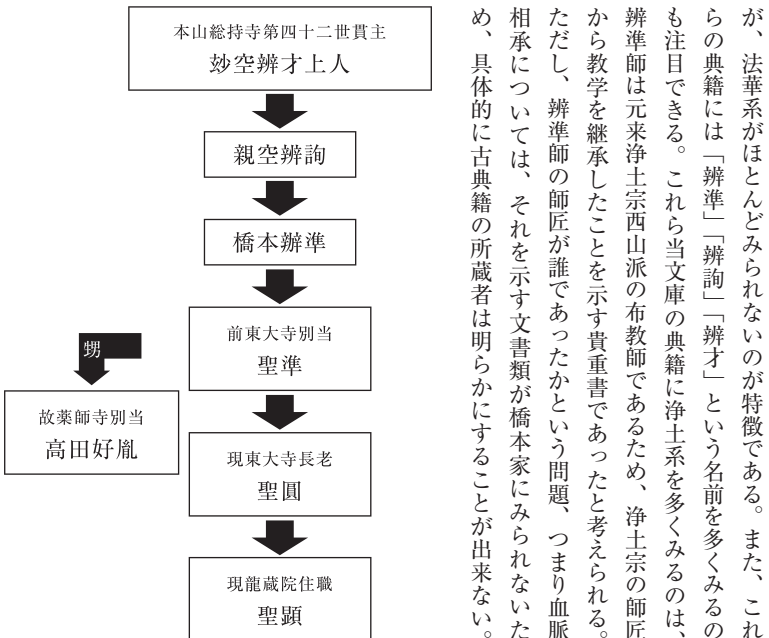
なお、聖準師の甥は高田好胤師（一九二五～一九九八）である。好胤師は昭和初期に薬師寺管主橋本凝胤師の徒弟となり、法相宗の僧侶となった。その後、法相宗管長・薬師寺管主を勤め、お写経勸進による薬師寺白鳳伽藍復興で堂塔を再建し、多くの政治、財界、文化人とも交流した。

この度、龍藏院の現任職である橋本聖頭師が所蔵されていた当文庫の蔵書を國學院大學地方史研究会の会員有志で調査し、**【仏教】** **【漢籍】** **【神道】** **【国文】** **【国史】** **【雑】**の六つに区分して文庫目録を作成した。その中で注目できる典籍を各分野から一点選び、本稿で紹介していきたい。

（有働智契）

【仏教】

仏教典籍を大まかに分類した場合、浄土系、華嚴・唯識系が多数を占めている。天台・真言系、禅宗系は僅かにみられる



が、法華系がほとんどみられないのが特徴である。また、これらの典籍には「辨準」「辨詢」「辨才」という名前を多くみるのも注目できる。これら当文庫の典籍に浄土系を多くみるのは、辨準師は元来浄土宗西山派の布教師であるため、浄土宗の師匠から教学を継承したことを示す貴重書であったと考えられる。ただし、辨準師の師匠が誰であったかという問題、つまり血脈相承については、それを示す文書類が橋本家にみられないため、具体的に古典籍の所蔵者は明らかにすることが出来ない。

そこで、これを紐解くために注目されるのが「尾張 辨詢」「西山 辨才」「定空（辨恵）」の記名をもつ典籍類である。

辨準師が入門し、教学を研鑽した時期は幕末期である。その頃の浄土宗西山派僧侶を探ると、西山派の三壇林である紀州の梶取総持寺に住持していた辨才上人（一七七〇～一八三四）が該当する。同文庫所蔵の『浄土宗西山派作法別傳』文政二年作（一八二九）にその弟子「辨詢」が「妙空辨才」から秘伝を受けたことが記され、師弟関係が明確に把握できた。師匠の典籍を伝授することは、正統後継者への直伝を意味することもあり、弟子の辨詢が師匠辨才の正統な後嗣であると思われる。一方で、次の「辨詢」と「辨準」の関係については明確な史料がみられない。そのため、「辨詢」と「辨準」が師弟関係であるか、あるいは同一人物であったかが問題となる。つまり、「ベン・シュン」「ベン・ジュン」の読み方によって、「辨詢」と「辨準」が同一人物か否かということである。当時の名称は読みが同じでも漢字が異なる場合があり、僧侶の名称は変更できるため、音が同じ漢字を変更した可能性も指摘できる。しかし、辨準が生誕したのは安政五年（一八五八）であるため、辨才の没年や辨詢が辨才から秘伝法脈を受けた時期と齟齬する。したがって、辨準が辨才を直接の師匠としたということは考え難く、む

しろ「辨詢」と「辨準」とは師弟関係であったと考えられる。

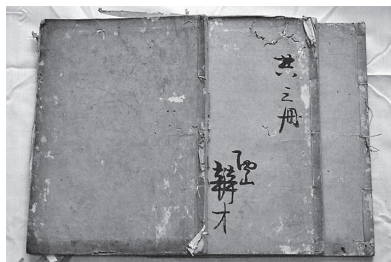
さて、この辨才上人に関して関本諦承師がすでに検討されている。^③ 辨才上人は幕末期における浄土宗の高僧で、著作を多く残し、「白木の辨才」と呼ばれた名僧である。彼は尾張国で生まれ、京都で修行した。そして紀州和歌山の壇林である本山総持寺貫主として、僧侶の教化活動に勤めた。さらに優れた学識のため、青蓮院宮、勧修寺宮などの宮家や一條大政所にご進講し、尾張藩主にも重用され、栗田宮より永代紫衣着用を許された高僧であった。また、辨才上人が総持寺在任中に中立神社と淡島神社の神主よる神葬祭問題が起こり、神社奉行に抗議書が提出されたが、双方の折衷案で解決したという。なお、次の著作が残されている。

- ① 繡像西山上人縁起
- ② 晨參の土産
- ③ 三祖要訓
- ④ 命の親
- ⑤ 法然上人御法語
- ⑥ 國師図会伝
- ⑦ 國師図会伝略解

- ⑧ 日課要訓
- ⑨ 證定疏拔萃
- ⑩ 円頓百語
- ⑪ 七箇条略註
- ⑫ 拾遺伝
- ⑬ 授菩薩戒勸誘記
- ⑭ 道歌問答西の台
- ⑮ 金剛鉾論私記

この中で橋本家に伝わる辨才上人典籍は、版本として⑧と⑮の「会本」が伝わっている。また、

これら辨才や辨詢の記名がある典籍で注目すべき書物には薬師寺僧基辨『大乘一切法相玄論』『百法明門論疏』などの唯識系典籍や「他見不許」と書いた数点の浄土系短尺、及び『浄土宗西山派作法別傳』にみる西山派の密教儀礼作法次第などがある。これら以外にも写本が多く所蔵されており、中でも辨才や辨詢などの直筆本は興味深い。その他で特に注目したいのは、辨才上人が所持していた旭江の直筆草稿本である『浄土境観要門闡幽記』であろう。これは『金剛鉾論』の解釈書である⑮



【図1】

『金剛鉾論私記』（会本）と共に天台教学の典籍である。ただし、『浄土境観要門闡幽記』については国書総目録や『仏書解説大事典』にはみられない新出の典籍であった。

そこで、本項では多くの仏教典籍の中で『浄土門境観要門闡幽記』を取り上げ、これについて解題を進めていきたい。

《解題》【図1・2】

〔外題〕 浄土門境観要門闡幽記

（「闡幽記」と略す）

〔首題〕 浄土境観要門闡幽記卷上并序

〔首題〕 浄土境観要門闡幽記卷中

〔首題〕（卷中統、二十五丁） 浄土境観要門

闡幽記卷下

〔形態〕 写本・四ツ目綴・袋綴・三巻三冊

〔年代〕 寛保二年（一七四二）

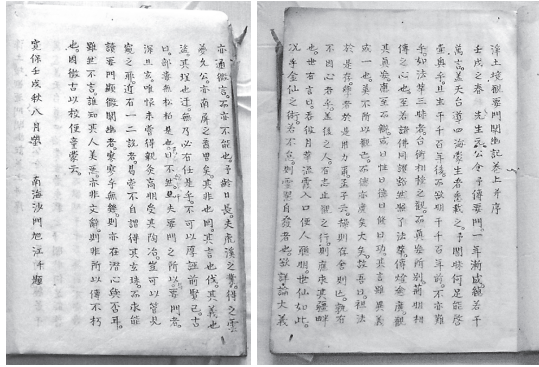
〔備考〕 卷中、表紙「西山辨才」手書

『闡幽記』は、旭江直筆の稿本であり、中巻表紙には「西山辨才」と所有者名が記され、序文と上・中・下巻の三巻で構成されている。序文の巻頭に「壬戌之春 先生公令予傳要門。一

年漸成（以下略）」と本書の経緯を記し、序文末には「寛保壬戌秋八月望 南海沙門旭江千題」と記され、寛保二年（一七四二）に南海沙門旭江が記したことがわかっては不明であるが、「南海」は紀州を示すことから、梶取総持寺に關係する僧侶と推察できる。浄土宗西山派に伝わる貴重な教学資料であったことが考えられる。

『闡幽記』の内容は中

国天台宗の懐則（虎溪沙門 興教大師）『浄土門境観要門』（十四世紀初頭作）を解説したもので、鼈頭や余白に解釈を注記したものである。この『浄土門境観要門』では、阿弥陀仏の観法に内観と外観の二つの立場があり、前者は方法唯心・一切唯識



【図2】

と観じ、後者は心の外の事物（唯色、唯香）と観じる、つまり、心と物を対比させて浄土境を心外に定め、これを内心に攪す一種の観心観仏の方法を考察している。⁵⁾この内容を考慮すると、所有者の辨才、及びそれを引き継いだと考えられる辨詢の所有典籍には唯識系典籍が多くみられるため、これらは『闡幽記』を学ぶにあたり、西山浄土教学を修学する基礎学問であったと考えられる。

このように、『闡幽記』は江戸後期における浄土宗西山派の教学展開を知ることができる貴重な典籍であることが指摘できる。辨才は『金剛鉈論』や『闡幽記』などについて、天台教学と浄土教をどのように結び付けて解釈していたのであろうか。この研究については今後の課題となろう。

（有働智英）

【漢籍】

橋本文庫の漢籍は、主に経書と漢詩に関連する書籍から構成されており、他の寺院から譲り受けたとおぼしき古典籍が多くみられる。

まず経書類であるが、橋本文庫内には『大学章句』『中庸

章句』をはじめ、大宰春台調点の『古文孝経正文』など、複数の経書の存在を確認している。このうち林羅山の『道春点論語』は、蔵書印や墨書から近世中後期の所有者が大和国の真言宗寺院、奥谷山地福寺であったことが判明しており、このことから何らかの経路で先述の地福寺から譲渡されたものであると思われる。一方『古文孝経正文』には「吉水善及」の記名があるが、「吉水」は浄土宗の華頂山知恩院の前身となった宗祖法然源空の庵「吉水御坊」に通ずることから、「吉水善及」は「知恩院の僧侶善及」を示していると思われる。

また漢詩類書籍では、『幼学詩韻』と『詩語碎金』に「吉水善及」の記名がみられる。これ以外の記名があるものとして、『広詩語碎金』に「西山僧侶泰空寛全」という名が確認できた。「吉水善及」と「西山僧侶泰空寛全」は、いずれもその名から浄土門の僧侶であるとわかる。同じく漢詩類の『円機活法』全三九冊は、全巻に「法



【図3】

輪』の黒丸印が捺印され、これらの印が二箇所を除き悉く黒墨で塗り潰されている点を見ると、これも元の所有者は別の寺院であったとみるのが妥当であろう。

今後、他の寺院から伝来したと思われる漢籍の元の所有者と橋本家の関係を明らかにしつつ、橋本家文庫そのものの形成過程を更に深く探っていく必要があるだろう。

《解題》【図3・4】

〔外題〕道春点論語

〔訓点〕林羅山

〔年代〕不明、「天明六歳」の書入アリ

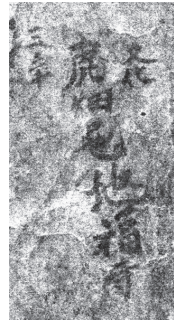
〔形態〕刊本・四ツ目綴・袋綴・十巻四冊

〔備考〕蔵書印「地福寺什物」（黒角印）

漢籍部からは橋本家文庫の『道春点論語』を取り上げる。まず始めに『道春点論語』の概要について述べる。

『道春点論語』は別名を『道春点論語集註』と言うように、南宋の朱熹の著作『論語集註』を基にして、林羅山（道春）が新たに独自の訓点を施したものである。『道春点論語』は羅山の晩年にあたる慶安年間⁶に出版され、木活字版が世に多く流通

した。更に羅山の著書には「羅山点」と「道春点」が存在し、相互に異同がある上、「道春点」自体も出版された年代によって内容に若干の差異があるという。⁷⁾



【図4】「鹿畑邑地福寺」の墨書

右の通り羅山の手になる『論語』は多様であるが、橋本家本『道春点論語』は木活字版ではない。また橋本家文庫には、この他に『道春点論語』と同装丁の『道春点孟子』に加え、それらとは異なる種類の『大学章句』『中庸章句』が確認できるが、『論語』と『孟子』の双方に「天明六歳」と書入れはあるものの、両者が同時期のものであること以上の確実な情報を得ることはできなかった。

橋本家本『道春点論語』の最大の特徴は、橋本家以前の所有者の名前が多く記されている点にある。一冊目に捺印された「地福寺」の蔵書印をはじめ、四冊とも「鹿畑邑地福寺」と墨書があり、かつて本書を所有していたのであろう複数の僧侶の名も併せて記されている。「鹿畑」は大和国添下郡の地名であり、現在は奈良県生駒市に編入されている。⁸⁾近世期は旗本堀田氏の知行地であり、当時村内に存在した寺院には「真言宗地福

寺」の名前がみえる。ここから、「地福寺」とは大和国添下郡の鹿畑村に所在した奥谷山地福寺と同一であるとみて間違いない。奥谷山地福寺は、真言宗御室派に属す寺院で、「奥谷山」の山号の通り、鹿畑の小高い山裾に建てていたと伝わる。⁹⁾堂塔伽藍を備え、本尊は湛海和上作の一尺五寸の不動明王木坐像であったが、大正三年に廃寺となった。

地福寺には、開山である洞水律師をはじめとする多くの僧侶が籍を置いていた形跡があるが、関連資料が現存しないため、その全てを詳らかにすることはできない。¹⁰⁾一方、本書には、「純円」や「性善」、「智道」など、多くの名前が確認できる。これは、僅かに伝わっている二世智運純円や性善和尚、智道善順沙彌ら地福寺僧侶たちを指していると思われる、この点から本書が地福寺の僧侶たちの元を転々としてきたのであろうことが読み取れる。

地福寺と橋本家の関係は未だ明らかではない。少なくとも、地福寺が大正三年に廃寺となるまでには同寺と橋本家の間に何かの関係があったと考えられる。今後漢籍類に対してさらに詳細な検討を加えることで、地福寺における経書蒐集のみならず、地福寺をはじめとする他の寺院と橋本家の関係をも明らかにすることができるのではと思われる。

(小林大峰)

〔神道〕

《解題》〔図5〕

〔外題〕 天神記図会

〔首題〕 天神垂跡要記

〔著者〕 蓮了大人

〔年代〕 元治元年（一八六四）甲子夏六月降証日

〔形態〕 刊本・四ツ目綴・袋綴・

十卷五冊（一卷中に二卷分）

〔備考〕 見返し…皇都書房屋文堂・皇都書林

石田治兵衛 忠兵衛

当文庫に残る神道系の古典籍には、『菅原道真公貫祿』や『天神御一代記』『天神垂迹要記』などがある。全体としては多くはないが、神道系に関しては菅原道真や天神信仰に関わる文献が多いようである。そのなかでも本項では『天神垂跡要記』を紹介したい。『天神垂跡要記』は著作者が蓮了という僧侶であるにも関わらず神道書であることから興味深く一考の価値があ

る。

『天神垂跡要記』は別名「天神記図会」ともい、全十巻からなる江戸末期に書かれた天神信仰に関わる版本である。橋本氏の所有していた文献は全十巻五冊で、二巻ずつの合本である。本書については翻刻が行われており、研究として挙げられるのが、真壁俊信氏と田坂順子氏¹²⁾による翻刻の解題だが、内容に深く言及した研究がなされていないのが現状である。そこで巻ごとに小見出しをつけると以下ようになる。

一巻 「菅原氏系図」（神代から垂仁天皇期）・「御血脈大略

図」（系図）

二巻 道真の伝記及び逸話等。

三巻 道真の伝記及び逸話等。

四巻 道真、筑紫国へ。死す。

五巻 道真、怨霊となり現る。太閤秀吉の天神信仰等。



〔図5〕

六卷 天満大自天神と本地仏十一面観音菩薩にまつわる逸話。

七卷 「本地靈験之部下」(長谷寺観音の靈験にまつわる逸話)。

八卷 「本地靈験之部下」(長谷寺観音の靈験にまつわる逸話)。

九卷 「垂跡靈験之部上」(天神信仰とその逸話)。

十卷 「垂跡靈験之部下」(天神信仰とその逸話)。

道真が生きていた頃にあたるのが、一卷から四巻までであり、逸話に並行して道真の生涯や天皇の御代とその時代に起きた歴史的事項の記述がなされている。五巻以降には道真死後の人々の天神信仰が記されており、特に七巻以降は長谷寺を中心とした仏教にまつわる逸話が多く記されている。真壁氏が本書を「仏教的色彩が濃い」としているのはこのためであろう¹³⁾。全体的にみると漢詩や和歌などの文化的内容も多く記されており、本文中には朝廷にて行われる祭事の故実や、名称や語句の説明、神道思想や仏教の基礎知識などの多岐にわたる分野の説明がなされている。

本書を検討するにあたり、仏教的色彩が濃いことは僧侶が記

している時点で当然であるといえよう。むしろ注目すべきはそれ以外の側面である。つまり、僧侶である著者が仏教以外についてどのような思想を以て本書を書き上げたのかという点である。例えば、本書の凡例条理において「我朝のことは、神儒仏の三道を以て、推さればまことの道のあらはれざることをしらずして」と述べているが、ここで「まことの道」という語を用いており、また、著者は自身の僧名に「大人」という語を用いている。このように「まことの道」や「大人」という語があることを鑑みると、本書が基づいている思想としては国学が挙げられるのではないか。一方で、文庫に所蔵される資料として本書を考えた時、なぜ橋本家に菅原道真・天神信仰系の資料が多いのかという疑問点が残る。このような僧侶における国学や神道思想は未だ明らかになっていない点があり、今後の展望と課題になろう。

(富田谷桃子)

【国文】

当文庫において国文に分類した蔵書群は主に、寺社の縁起や人物の伝説を述べた説話類の典籍や、和歌や俳句に関連した典

籍が多くみられた。和歌に関する典籍では、『改正百人一首』や『古今和歌集』『和歌麿之塵』などの刊本があったが、『改正百人一首』は往来物である。また、『和歌麿之塵』は有賀長伯(二六六一〜一七三七)の著作の一つである。有賀の文献は死後、明治期に入っても増刷されており、当時の和歌創作において必携であった。蔵書の『和歌麿之塵』には表紙に「橋本梧竹蔵」と持ち主の名前が書かれており、梧竹個人の所有物であったことがわかる。

尚、これら蔵書の中には、当文庫に収められる以前の持ち主の名が記載されている典籍がいくつかみられた。前述した『改正百人一首』には見返しに手書きで「第四區尾張國葉栗郡村久野村青山兵十郎」とあり、『安部仲磨生死流轉』には裏見返しに「山城国相楽郡綺田村松井庄三郎」と書かれている。その他にも、解読不明であったが当文庫以外の名が記載されている典籍が確認できた。複数の持ち主の名が認められることから、当文庫の成立過程及び、橋本家を取り囲む典籍群のネットワークを知る資料となるだろう。

【解題】【図6】

〔外題〕俳諧句格

〔形態〕写本・四ツ目綴・袋綴・一冊

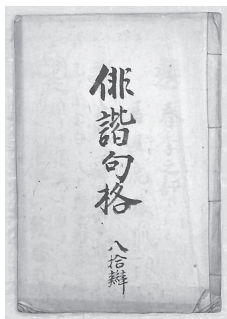
〔年代〕不明

〔備考〕催 発啓社

京都 白雀園正祇宗 評並撰

大阪 馬田江公年宗匠 評並撰

次に、当文庫より『俳諧句格』を紹介する。本書は句集であり、句会が行われた期日は記載されていないが、評者は「京都白雀園正祇宗」、「大阪馬田江公年」と記載されていることから、明治期のものであることが推察される。内容としては、「輯句八十辯一辯毎二評點并二勝劣點ヲ乞フ尚余白二十八十辯之内三十一章例之通り御拔撰ヲ希フ」と述べられているように、それぞれの歌には朱墨で合点がされており、二、三行ほどの評価が記されている。どのような基準で評価がなされたのか、当時の添削の在り方を知ることができるだろう。また、題は「春期之部 馬丑鹿猿狐」



【図6】

と記載されている。内容としては牛や鹿が多く詠まれているものが多いものの、ほぼ均等に選ばれている。村に猿回しが来たことなどの句がみられることから、当時、各動物たちが人々などのような印象をもたれていたのか、どのような生活を共にしていたのかを知ることができ興味深い。さらに今回、紙幅の都合上詳細な紹介には至らなかったが、『千草会月並俳句集』や『ほととぎすの巻』という句集もみられた。管見限りでは、『俳諧句格』と『ほととぎすの巻』には、「柳泉」という人物の句が前者に九句、後者に二句確認された。なお、当文庫の蔵書である『平城吟社存稿』には、「柳泉橋本辨準奈良人」という記載があることから、『俳諧句格』や『ほととぎすの巻』にみられる「柳泉」という人物は橋本辨準師の雅号である可能性が高い。これらの書籍の存在は、所有者が俳諧活動に積極的に参加していたことを指摘できる。

明治期の始め、俳句は、江戸から続く月並俳諧が盛んであり広く行われていたが、明治二十五年から正岡子規によって旧派俳諧の革新が行われ大きく展開していく。村山古郷は「明治初期の俳句界は、俳句史の上では全く無視され、黙殺された観があるがその価値観とは別に、全国津々浦々辺陬の寒村にも、俳諧宗匠はおり、俳諧の運座や点取が行われていた」と述べてお

り、新派俳諧の母体であり背景となった旧派俳諧を再確認していくべきだと指摘している。このような問題を考えていく際、特に「俳諧句格」のような文献は、他の文献とも比較していくことで明治期における民衆の俳諧活動の様子が窺える資料となるだろう。¹⁷⁾

(松田采菜)

【国史】

《解題》【図7】

〔外題〕切支丹実録

〔形態〕写本・四ツ目綴・袋綴・八卷一冊

〔年代〕不明

次に、『切支丹実録』を紹介する。龍藏院文庫は仏教典籍が大部分を占めるが、キリスト教に関するものはこの一冊のみである。「実録」は小説に分類されるが、近世においては事実と認識していた者も少なからずいたようである。¹⁸⁾なお、菊池庸介氏は、「実録」を「實在の事件や人物について、事実であることを標榜しつつ小説的に書き、主に写本で流通し成長する読み

物」と定義している。それを踏まえると、本書は文学作品ではあるものの、キリスト教の知識が必要になった明治初期において、東大寺高僧のキリスト教に関する知識形成を考える上で非常に興味深いものである。

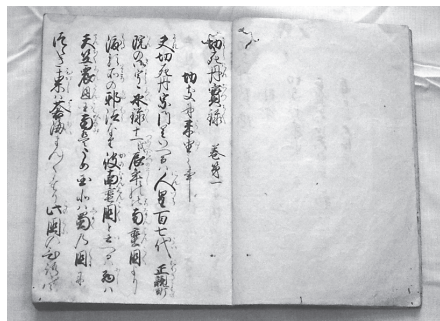
以下内容を紹介する。本書は写本であり、紙質の状態から察するに、幕末から明治初期に写されたと推察される。作者・成立年代は不明であるが、後述するように、成立年代については文中より検討を加えたい。

本書は八巻が一冊に纏められており、はじめにキリスト教を「南蛮国より渡る所の邪法」と定義し、キリスト教伝来（本書では永禄十一年（一五六八）と記されているが、天文十八年（一五四九）の間違いである）から織田信長の庇護による南蛮寺の建立や、豊臣秀吉のバテレン追放令によるキリスト教排斥の始まりを経て、寛永十四年（一六三七）の島原の乱鎮圧までを描く。本書と同様の内容をもつ書籍としては寛永十六年（一六三九）に刊行された『吉利支丹物語』や『切支丹来朝実記』が知られている。¹⁹

本項では、紙幅の都合上、巻八のみを紹介する。目次は以下の通りである。

市橋島田妙術之事
附り秀吉公御立腹之事
天帝教御吟味之事
後宗門蜂起之事

市橋庄助と島田清安という二人の医師が秀吉に召出され、手品を見せるなどして秀吉の要望に応えていく。最後に幽霊が見たいとの命を受け、二人は呪文を唱えるが、現れた幽霊は秀吉が木下藤吉郎と名乗っていたところに寵愛して褒美を与えられると思っていたが、秀吉は二人がキリシタンの「徒類」だと激怒し、磔に処した。その後の岡本大八事件など、一連のキリスト教排斥の様子を描く。そこから島原の乱へと続き、乱終結後の状況を



【図7】

「誠に太平の御代のしるしぞ有難き」と徳川の世の平和を賞賛して締めくくる。しかし、鳥原の乱については分量が非常に少ない。その理由については、文末に「天草の事ハ鳥原軍記に委しく出られここに略す」との記述から見出すことができる。

『鳥原軍記』の存在を前提とし、本書があるということである。『鳥原軍記』とは、寛永十四年（一六三七）から翌十五年二月末に至る五か月間の、鳥原の乱の攻防の経緯を詳細に描いた軍記であり、刊年が記されたもので最も古いのは慶安二年（一六四九）である。本書の成立年代は不明であるが、このことを前提にすれば、本書は、慶安二年以降に『鳥原記』などの文献を参考にし、それをもとに新たな文学作品として生み出されたと考えられよう。したがって、本書は国史とともに文学の性格をも併せ持った資料といえよう。

以上、『切支丹実録』の内容を簡潔に紹介した。先述の通り、『実録』は成長を続けるものと定義があつたが、本書も同様に位置づけることができるであろう。キリスト教伝来を記した「実録」は他にも数多く存在するが、写本という性格上、成立年代を特定することが難しい。「実録」の性格を踏まえ、成立年代などをもとに体系化することで、近世から近代における対キリスト教認識の変遷をみることはできないのではないか。

（上島亮平）

【雑】

《解題》【図8】

〔外題〕 十七兼題略記

〔首題〕 酒井最正著十七兼題略記

〔著者〕 運善寺酒井最正

〔年代〕 明治七年（一八七四）三月

〔形態〕 刊本・四ツ目綴・袋綴・一巻一冊

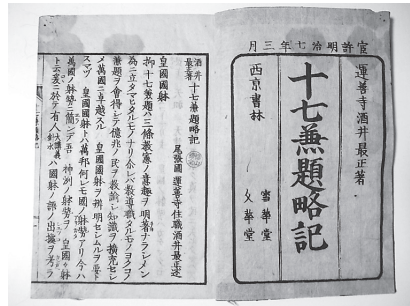
〔備考〕 見返し・西京書林西村七兵衛 山内正五郎

本書は、愛知県運善寺の僧侶であつた酒井最正が発行した「十七兼題」に基づき記された教部省教導職向けの解説書である。酒井による別著『三國仏法伝通縁起質問録』の奥付によると、²⁰酒井は東本願寺・真宗大谷派の住職であつたようである。²¹教導職とは教部省が任命する説教師であり、主に国教としての神道と近代的価値の啓蒙を任務とした。²²教部省が設立されると、全国の神社、仏教寺院は教部省管轄となり、教導職には僧侶も含まれた。²³本書は、当時多く発行された教憲と兼題に関する

る教書の一つであると考えられる。本書は一卷一冊であり、「皇国国体」「道不可変」「制可隨時」「皇政一新」「人異禽獸」「不可不学」「不可不教」「国法民法」「律法沿革」「租税賦役」「富国強兵」「産物製物」「文明開化」「政体各種」「役心役形」「權利義務」「万国交際」の順に啓蒙的項目を十七挙げ、内容を解説する。なお、題字が全て四字に統一されていることを特徴として指摘しておく。以下、内容をABCと分け紹介する。

A 「皇国国体」「道不可変」

国民教化の理念としての項である。冒頭の「皇国国体」の項では、「教導職タルモノヨクコノ兼題ヲ会得シテ億兆ノ民ヲ教諭シ」と、本書が教導職向けのテキストであることを明示している。皇国国体、神州などの用語や延喜式の概要、皇統一系な



【図8】

どの語が並び、酒井は仏教徒でありながらも極めて神道に寄り添った性格の文章を書いていることがわかる。次に、「道不可変」では神仏儒それぞれの特徴を挙げつつ、神仏儒以外の当時勃興した新興宗教へも言及している。これらを統合して「道」とし、その重要性を説く。後述するが、教部省設立の背景には、仏教界を神道に取り込みたい政府による意向があり、本書がこれを受けて書かれていることがわかる項である。

B 「制可隨時」「皇政一新」「人異禽獸」「不可不学」「不可不教」

「国法民法」「律法沿革」「租税賦役」

具体的に近代的価値の啓蒙を目的として書かれた項である。近代国家としての法制度のあり様を記した内容となっている。法が柔軟に変更され得る近代国家という概念の解説や、近代国家としての体制を学問の種類や内容、学制と教育の重要性、權利と義務など、具体的な内容で解説している。

C 「富国強兵」「産物製物」「文明開化」「政体各種」「役心役形」

「權利義務」「万国交際」

国家的団結や文明と開化の意味を解説する項である。世界的政治体制を「君制」「民制」と分類し、日本と比較する。孟子

を引用し、国民がそれぞれの役割を果たす重要性、上下貴賤なく権利と義務を有すること。上意下達の遵守など、国際化への対応などの解説がこれらの項の特徴といえる。「万国交際」では貿易の重要性を説き、開国への抵抗感を意識して書いていると推測される。飢饉への対応など、庶民へのわかり易さを重視して書いている。

以上、内容を簡潔に紹介した。本書が刊行された時期は、仏教が神仏判然令から発展した廃仏毀釈運動の迫害を受ける立場にあった。明治初期、天皇の政治的位置付けの必要性から、薩摩閥をはじめとした政府は、キリスト教が共和制に強い影響を及ぼしたと理解していた。彼らが当時の状況に対し神道勢力のみでの対応に限界を感じていたため、儒仏の取り込みへと動くことになる。一神教的性質に似た一向性を持つ真宗勢力の中心であり、また佐幕派であった東本願寺大谷派は、これらを要因とした圧力への危機感から勤皇姿勢を極めて鮮明にしていた。³⁶これが同じ大谷派住職であった酒井に本書を書かせた強い動機となったのであろう。本書の刊行がなされた、明治五〜七年は島地黙雷を中心として真宗側からの大教院離脱運動が盛んであり、その中で刊行された本書は、酒井が真宗内部における思想

の方向性を提示する一つの資料となろう。

(矢森一博)

追記

当文庫目録は『寺院史研究』十五号(平成二十八年刊行予定)に掲載する。

なお、本文庫調査にあたり、蓑輪顕量先生、吉田叡禮先生、根岸茂夫先生、城崎陽子先生、太田俊明先生、前島信也先生、及び小林純承先生をはじめ浄土宗西山派本山総持寺皆様におかれましては多大なご教示を頂戴した。また三田春日神社様には調査場所のご協力を賜った。関係各位に謝辞を申し上げる。

注

- 1 橋本家に保管されている辨準師の僧籍書類を参照。(度牒、辞令状など)
- 2 故薬師寺長老橋本凝胤師は奈良県平群郡出身で法隆寺管主佐伯定胤師の徒弟として東凝胤と名乗り、大正時代に薬師寺管主橋本隆遍師に養子となって橋本姓を名乗った。ちなみに橋本隆遍師と東大寺の橋本家は血縁関係ではない。(山田法胤・青山茂編『大基芳影』薬師寺、一九八四年)
- 3 関本諱承『関本諱承全集』第二卷(講説・史伝篇)(同朋舎、一九七九

- 年)
- 4 江戸期における唯識学者で薬師寺僧基辨がおり(高次喜勝「薬師寺大同坊基辨の基礎的考察」『南都仏教』東大寺図書館、二〇一三年参照)、基辨の著作を十点所有していることを鑑みると、「闇幽記」を学ぶ上で唯識教学の理解が必要であったことが解明できる。
- 5 『仏書解説大辞典』参照。なお、「浄土門境観要門」関係についての詳細な研究は管見でみられない。筆者は浄土思想と唯識思想を融合した思想体系と推察し、浄土思想における唯識の展開を見る上で重要な教学体系と位置づけられよう。今後の成果を俟ちたい。
- 6 村上雅孝「松永昌易の『首書五経集註』における訓点について」(『アールテスリベラレス』二十八号、岩手大学人文社会科学部、一九八一年) 村上氏前掲稿、及び同氏「林羅山の「大学諺解」をめぐる諸問題―近世の漢文訓読史の立場から―」(『歴史と文化』岩手大学人文社会科学部、一九八一年)
- 7 『角川日本地名大辞典(二十九) 奈良県』(角川書店、一九九〇年)
- 8 『生駒市誌 通史・地誌編』(生駒市、一九八五年)
- 9 広上塔量『地福寺開山洞水律師行業記』(大慈林サンガ、一九八二年)
- 10 真壁俊信『天神垂跡要記』について(上)、『神道古典研究所紀要第一号』神道古典研究所、一九九五年)、『天神垂跡要記』について(下)、『神道古典研究所紀要 第二号』神道古典研究所、一九九六年) 真壁氏は全十巻を、田坂氏は五巻までを翻刻している。尚、本書の著作者である「北野祠僧連了」については、不明であったとしている。
- 11 田坂順子『天神垂跡要記』翻刻と解題(一)、『福岡大学総合研究所報』第二三二号(人文・社会科学編(第一六一号)、福岡大学総合研究所、二〇〇一年)
- 12 『天神垂跡要記』翻刻と解題(二)、『福岡大学総合研究所報』第二四五号(人文・社会科学編(第一七二号)、福岡大学総合研究所、二〇〇一年)
- 13 『天神垂跡要記』翻刻と解題(三)(巻四)、『福岡大学研究部論集』(人文科学編(A Vol. No.7))、福岡大学研究推進部、二〇〇二年)
- 14 『天神垂跡要記』翻刻と解題(四)(巻五)、『福岡大学研究部論集』(人文科学編(A Vol. No.8))、福岡大学研究推進部、二〇〇三年)
- 15 真壁氏前掲注11(上巻)
- 16 有賀長伯は、近世地下歌壇の一流である貞徳系の歌人の一人である。二条家歌風の民間への普及に努め、歌文集や多くの啓蒙書も出した。啓蒙書の七冊は「有賀家七部書」といい、今回の蔵書である『和歌麈之塵』がこれの一つにあたる。(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第一巻、吉川弘文館、一九七九年初版、上野洋三「元禄和歌史の基礎構築」岩波書店、二〇〇三年)
- 17 島で生まれた歌人である。幼少の頃から父に俳諧を、後藤松陰に漢籍を学んだ。馬田江七世を継承し、『玉兔』などを編纂した。(大塚毅編『明治大正俳句史大事典』上下、世界文庫、一九七一年)
- 18 村山古郷『明治大正俳句史話』(角川書店、一九八二年)
- 19 『国文』の記述にあたり、村山古郷「明治の俳句と俳人たち」(河出書房新社、一九八三年)を参照。
- 20 日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三―八五年)
- 21 菊池庸介氏「近世美録の研究―成長と展開―」(汲古書院、二〇〇八年)に拠ると、キリスト教伝来に関するものだけで、九〇冊以上の文献の存在が知られている。異同、系統の分析が必要となるだろう。
- 22 酒井最正「三國仏法伝通縁起質問録」(近代デジタルライブラリー、一八七六年) (<http://kindai.ndl.go.jp/>)
- 23 前述の奥付によると「尾張国第四大区十一小区葉栗郡大日比村四番地」

- に所在した蓮善寺住職であった。
- 22 林田康順「明治前期における「信教の自由」の獲得と受容——浄土宗政を中心として——」（『印度学仏教学研究』四十三卷第一号、一九九四年）
- 23 岡田莊司編『日本神道史』（吉川弘文館、二〇一〇年）
- 24 高橋陽一「大教院の教化基準——教典訓法章程と教書編輯条例を中心に——」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五号、一九九一年）
- 25 阪本是丸「明治初期における政教問題」（『宗教研究』五十七号、一九八三年）
- 26 奈良本辰也・百瀬明治『明治維新の東本願寺』（河出書房新社、一九八七年）